

ソ連の動向重要日誌

権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジア動向年報
雑誌名	アジア動向年報 1974年版
ページ	[807]-813
発行年	1974
出版者	アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00039376

ソ連の動向重要日誌

1月

1日 ▶亡命ソ連船員ピストル自殺——昨年9月、カナダ沖合いでソ連船から脱出、カナダに亡命したソ連船員セルゲイ・クルダコフ(21)が1日、ロサンゼルス郊外サンベルナルジ郡のランニングスプリングにある山小屋でピストル自殺した。

3日 ▶死刑含む厳しいハイジャック法制定。

▶トルクメンのキルピチリ天然ガス——トルクメン共和国の東部カラクームのキルピチリ天然ガス床で深さ3,200メートルのところから最初のガス噴出があった。

▶キューバに財政援助——カストロ・キューバ首相は3日夜、ソ連がキューバの財政赤字をカバーするため3年間の新たな借款を供与すると発表した。

5日 ▶新型戦闘機開発、ミグ21・23の改良型——ロンドンの軍事筋が5日語ったところによると、ソ連はミグ21と23を改良した新型の超音速戦闘機を開発したもよう。

6日 ▶ソ連、新型 ICBM 実験成功。

9日 ▶バムの鉄道建設——建設中のバム＝トウインダ鉄道で新しく数キロメートルのレールが敷かれた。この鉄道はアムール州北部の諸地区をシベリア幹線につなぐものである。

▶サモトロール＝アリメチェフスク石油パイプライン建設。

▶ソ連車、デンマークでは米車抜く。

▶チェコのアサーク書記長にレーニン勲章。

▶米日に次ぐ工業国は仏とソ連機密報告が予測。

▶コスイギン首相チュメーニ市着。

11日 ▶仏大統領訪ソ。

12日 ▶仏ソ共同コミュニケ発表の内容。

▶トルスコフ大使、北京へ帰任。

▶本年最初の北極航路開始。

13日 ▶日ソ航空交渉合意。

15日 ▶ワルシャワ機構外相会議。

16日 ▶濃縮ウランソ連が対日輸出打診——関係業界筋が16日明らかにしたところによると、ソ連政府は非公式に、濃縮ウランを日本へ輸出したいと申入れてきている。

17日 ▶大平外相、ソ連大使会談。

▶「環境会議」発足。

20日 ▶日本周辺のソ連機の動き活発化。

▶流感猛威を振う。

23日 ▶ウランゲリヤの新港をポストーチヌイ港と命名。

27日 ▶チュメーニ＝ウラル間のガスパイプラインの複線工事中。

29日 ▶チュメーニ＝トボリスク間 220 キロメートルの鉄道建設完成。

30日 ▶パリから帰国中の北ベトナム外相、モスクワ到着。

31日 ▶西シベリアの石油をボルガへ送るパイプライン敷設。

▶偵察ソ連機を追って沖縄から初の緊急発進2回。

2月

3日 ▶ポリャンスキー 第1副首相、農相に任命さる。

5日 ▶パキスタン特使とソ連外相会談。

▶中国、ソ連政府幹部の降格で非難——新華社通信は5日ソ連のポリャンスキー 第1副首相の降格とマッケビッチ農業相の解任に関し、これは「ブレジネフ一派がその農業政策の失敗を2人に転嫁させたものである」と非難した。

6日 ▶チュメーニ油田開発計画促進に日本の専門家派遣。

▶スウルクウト国営地区火力発電所 20万 kw の稼働開始。

▶ウランゲリヤ鉄道駅の建設開始。

7日 ▶エジプト大統領特使訪ソ。

9日 ▶日米通商関係妥協は不可能とタス通信が論評。

▶チュメーニ油田共同開発輸銀融資決まる。

13日 ▶ルーブルも10%対ドル切り上げ。

▶ソ連・アフガニスタン国防相会談。

15日 ▶ベトナム後の米・中・日の反ソ共同戦線への警戒色強まる。

16日 ▶対ソ貿易で西独、日本を抜き1位となる。

▶ソ連ミサイルをシリアに供与。

▶ソウガワニ＝ウラジボストーク間に Yak 40型で旅客空路開設。

17日 ▶ソ連過去2週間に9回も ICBM 実験。

- 18日 ▶ソ・米共同ベーリング海調査開始。
 19日 ▶日ソ貿易年次協議始まる。
 22日 ▶ソ経済委科学技術小委終わる。
 ▶ブレジネフ書記長プラハ入り。
 ▶サモトロール油田の発展——チュメーニのサモトロール油田は1969年に開発されたが現在その採油量は3800万トンに達している。
 23日 ▶日ソ貿易年次協議終わる。
 ▶英ソ科学文化交流協定調印。
 ▶南ヤクト炭田開発を推進することで日ソ石炭委一致。
 25日 ▶ソ連・チェコが共同声明。
 26日 ▶ソ連が2隻目の本格空母建造に着手。
 ▶エジプト国防相ソ連書記長と会談。
 ▶北カラフトのデ・カストリ湾に年中船が入るようになった。
 27日 ▶米ソ外相会談。
 ▶北鮮代表団訪ソ、ブレジネフ書記長と会談。
 28日 ▶ソ連漁業代表団が来日。

3月

- 1日 ▶19年ぶりに党員証の交換開始。
 ▶カニ交渉モスクワで開始。
 ▶日ソ漁業委員会東京で開幕。
 ▶エジプト・ソ連共同声明。
 3日 ▶ソ連機、能登半島沖55キロまで異状接近。
 ▶中ソ貿易、上向きに。
 6日 ▶米ソ、漁業協定に調印。
 ▶極東海運の浚渫船昨年より半月早く動きだす。
 ▶タタール海峡のフェリー連絡船建設すでに2年おくれる。
 ▶チュメーニの採油量2ヵ月間に1220万トン。
 ▶ソ連書記長に田中首相が親書。
 7日 ▶ソ連紙、エジプト紙の編集長を非難。
 8日 ▶ウスチ・イリム水力発電所第1タービン水道の建設進む。
 ▶ソ連材の輸入拡大、見返りに借款供与。
 ▶ソ連、木材大幅値上げ。
 ▶英紙、弾圧にあえぐソ連知識人について報道。
 ▶パトリチェフ通産相、豪州訪問。
 ▶ソ連、綿花も輸出価格値上げ。
 12日 ▶第2次 SALT ジュネーブで今日再開。
 ▶米オクシデンタル社と80億ドルの契約調印。
 14日 ▶食品機械工業会へソ連から技術交流申入れ。
 ▶コスイギン首相、イラン訪問。
 ▶シーズンにはいる極東漁業。

- ▶ソ連書記長米財務長官会談。
 16日 ▶ソ連・イラン共同声明。
 17日 ▶金地金の対日輸出に必ず。
 18日 ▶パトリチェフ外国貿易相豪州訪問終わる。ソ豪通商協定調印。
 ▶文学新聞チュメーニ開発に対する中国の反対を非難
 21日 ▶73年度日ソ文化交流協定に調印。
 23日 ▶ノボシビルスクで新オビ川鉄橋工事中。
 24日 ▶サハロフ博士 KGB に査問さる。
 26日 ▶ナホトカの石油積み込み基地、4万トンタンカー収容可能。
 27日 ▶タタール海峡フェリー《サハリン=1号》バルチック海からインド洋へ入る。
 28日 ▶ソ連大使、ブレジネフ返書を首相へ。
 ▶フルチェフ文化相訪米。
 29日 ▶北方領土で戦後の国境は神聖とソ連誌が反対論文。
 ▶軍、党書記会議終了。
 ▶イルクーツクへの第2線パイプライン工事エニセイ河に達す。
 ▶本日チュメーニ油田の総産油量2億トンに達す。
 30日 ▶ソ日協会長にグジェンコ船舶相選出。
 31日 ▶ヤクーツクで192キロメートルの新しいガス・パイプライン建設完了。
 ▶乗客、日航機内で急死——31日午後零時10分頃、日本海上空を飛行していた東京発モスクワ行き日航401便DC8型機(乗員12人、乗客116人)内で、乗客の海外石油開発常務、志位正二氏(53)が心臓発作を起こし乗り合わせた内科医師が応急手当をしたが、10分後に死亡した。同機は、ハバロフスク空港に緊急着陸をしようとしたが天候が悪かったため東京に引き返し、午後3時40分、羽田空港に着陸した。志位さんは同社の檜垣順造専務(61)とともに、西シベリア、チュメーニ石油開発計画の予備交渉のためモスクワへ行く途中だった。志位氏は元関東軍参謀で、シベリアに抑留され、帰国後ラストボロフ事件に関係があったと伝えられる。その後シベリア開発の専門家として活躍していた。
 ▶樺太で終戦時自決した交換嬢9人に叙勲。

4月

- 1日 ▶ロストフ州からブリヤートへ移民団到着。
 2日 ▶西へ流れるチュメーニの原油——サモトロール=チュメーニ=クウルガン=ウファ=アリメチェスク間約2,000キロメートルの石油パイプラインは昨日埋設とパイプ溶接作業が終わった。工期は約1年。5月1日までにチュメーニの石油がこのパイプラインでバシキール、

タタールの企業へ、さらにポーランド、東独、チェコ、ハンガリーなどへ石油を供給する《ドルージバ》(友好)パイプラインに流れることになる。

▶コスイギン首相、スウェーデン訪問。

3日 ▶「企業合同」の全面的実施にふみきる。

▶ポドゴルヌイ、フィンランド訪問。

4日 ▶沿海地方の穀物種まき始まる。

▶フィンランド外相、訪ソ。

5日 ▶アルマ・アタ航空駅拡張中——現在アルマ・アタ市の飛行場から飛び立つ飛行機は《IL=62》、《TU=104》、《IL=18》、《AN=24》型である。カザフスタン共和国の空路は7万8000キロメートルに達し、旅客の急激な増加で航空駅は狭くなったので現在新しくターミナル・ビルの拡張工事が進められている。

▶ブレジネフ書記長西独訪問を正式に受諾。

▶ヤクーチャのマスタフスクの天然ガス、ヤクーツク市へ入る。

▶ウランゲリヤ湾のポストチヌイ港の築港工事進む。

▶ヤクート天然ガス、米国除き日ソで開発したい旨、ソ連から申入れ。

▶日ソ交渉に「領土」問題は不可欠と官房長官語る。

▶コムソモリスク付近アムール川鉄道フェリー連絡開始。

7日 ▶ポドゴルヌイ議長フィンランドから帰国。

10日 ▶カザフスタンのイリ川の航行はじまる。

▶ソ連、サケ、マス7万トン台を要求。

11日 ▶ノルウェー、ソ連外交官追放。

12日 ▶《サハリン=1》号日本海に入る——タタール海峡の鉄道フェリー《サハリン=1》号はバルト海から1万6000哩の航海後日本海に入った。

▶中国貿易交渉団、モスクワ着。

▶メキシコ大統領訪ソ。

13日 ▶出光、チュメーニ原油約100万トン輸入契約。

▶日ソ漁業交渉、農業不振で漁獲重視。

14日 ▶エニセイ川航行開始。

▶ゾロツーヒン、調達相に任命さる。

16日 ▶新聞大使、漁業交渉早期妥結要求でソ連漁業相と会談。

▶オホーツク海の海底油田調査進む。

17日 ▶エリザベス女王主催の晩さん会にスミルノフスキーソ連駐英大使が出席。

18日 ▶出国ユダヤ人へ教育税中止か——ニクソン米大統領は18日、ソ連が国外に移住するユダヤ人に支払いを義務づけていた教育税の適用中止を正式に保証する文書、クレムリンから受け取ったことを明らかにした。

▶チュメーニで発電船《セーベルノエ・シャーニエエ

3》号進水。

20日 ▶米人学生7人、ソ連内務省へ乱入。

▶グレチコ国防相、ルーマニア訪問。

23日 ▶オビ川航行開始。

▶『コムニスト・ウクライナ』紙、シェレスト批判とAFP報道。

24日 ▶カニ漁、仮調印。

▶サヤノ・シューシェンスカヤ水力発電所建設進む。

▶日ソ漁業交渉妥結、サケ・マス9万1000トン。

▶西カムチャツカのタラバガニ6万箱で日ソ漁業交渉合意。

25日 ▶冷延鋼板の酸洗い自動車制御システム技術新日鉄が対ソ輸出。

▶トムスク州の石油生産、第1四半期で150万トン。

▶ハバロフスク地方春蒔き遅れる。

26日 ▶バングラデシュにミグ戦闘機を贈与。

▶党中央委総会開幕。

▶アムール川の流水はじまる。

27日 ▶ソ連共産党中央委総会終わる——26日から開かれていたソ連共産党中央委員会は27日午後5時(日本時間同11時)閉会し、シェレスト、ウオロノフ両政治局員が解任され、アンドロポフ政治局員候補(国家保安委議長)が政治局員に昇格、さらにグロムイコ外相、グレチコ国防相(いずれも中央委員)の2人が政治局員に昇格した。

29日 ▶廖承志、大阪でソ連を非難。

30日 ▶ブラック・アルミニウム工場完成。

▶ビリビノ原子力発電所建設進む。

5月

2日 ▶チュメーニ州の天然ガス26兆立方メートル。

4日 ▶キッシンジャー補佐官モスクワ着。

6日 ▶月衛星ルノホート発射失敗。

▶訪ソ中のキ補佐官、ソ連首脳と連日の会談。

9日 ▶キ補佐官、訪ソ終了。

11日 ▶欧州自由金市場への金放出を中止。

12日 ▶ブレジネフ書記長、東独訪問。

▶ソ連艦隊3隻(潜水艦1隻を含む)が台湾海峡通過——台北の国府当局はソ連艦隊が12日に台湾海峡を通過したと発表した。ソ連の艦船は台湾の東を通りバシー海峡から南シナ海へ入るのが常であるが、約20年ぶりにソ連艦隊が台湾海峡を通過した。これに先だちソ連は国府に事前通告したとみられる。これは国府を事実上独立国として取り扱うことで北京政府に対する面あてを行なうと共に示威行動をとったものと推測される。

13日 ▶ソ連・東独共同声明発表。

14日 ▶東京・シベリア経由航空路開設でソ連、西独が仮調印。

15日 ▶ナホトカ港から北方への貨物輸送開始。

18日 ▶ブレジネフ書記長西独公式訪問。

▶ソ連艦艇の動き活発、大型乾ドックも北上。

22日 ▶レナ河のオセトロボ港活況を呈す。

23日 ▶シミット岬に北極気象観測所設置。

25日 ▶アイスランドにソ連艦隊接近、英国とアイスランドの抗争を牽制。

27日 ▶著作権条約に参加。

▶墜落したソ連の空軍将校西独に亡命申し出。

28日 ▶アルマリク氏の釈放遅れ“許しがたい暴挙”とサハロフ博士が非難。

▶アルマリク氏を再逮捕。

29日「2つの朝鮮」定着へ——先に韓国選手団に対してユニバーシアード・モスクワ大会から招請状が届いたのに引き続き、29日今度は韓国人演劇家に対してソ連が入国ビザを出した。

▶コルイマ州への船舶運行開始。

30日 ▶バリ航空ショーでソ連武官逮捕——バリのブルジュ空港で開かれている国際航空ショーで30日、駐仏ソ連大使館の武官が、フランス国防省展示場からジャイロスコープとレーザー光線関係の装置を盗んだところを警備員に逮捕された。

6月

3日 ▶ソ連 SST パリ航空ショーで墜落。

4日 ▶イラン国防相訪ソ。

5日 ▶チュコトカ沿岸への海上航路活況を呈す。

7日 ▶チュコトカの採金作業はじまる。

8日 ▶今シーズンのナホトカ=ナガエボ旅客船航路開始。

▶ヤクート天然ガス開発で米ソ覚書調印。

10日 ▶中央アジア、ワフシ盆地に170キロメートルの鉄道開通。

11日 ▶西シベリアのザプシブ製鉄工場でソ連最大の350トン転炉組立開始。

13日 ▶文学新聞、汚染使節団と廖承志非難——『リテラトゥルナヤ・ガゼータ』紙は廖承志訪日団に対し皮肉たっぷりの記事をのせた。それによると、『廖承志は日本国内でいろいろ余計なことをしゃべり、日本国内の環境を汚染したばかりでなく、日本をめぐる国際環境をも汚染した。彼等は一大汚染使節団であった』『廖承志は次のように口をすべらせた。“ソ連の石油には人間の遺伝子に悪影響を与える悪い物質が含まれており、もし、日本人がチェルノブイリの石油を使うならば紀元2000年まで

に日本人はみな猿に退化しているであろう”。また次のようにも述べた。“日本は憎むべき敵ソ連に備えるために強い軍隊を持つべきである”“北京の現在の敵はソ連と日本共産党の2つである”“日本にきてみて日本人の中に憎むべき野蛮人がいることを発見した。それは日本共産党である”』というような調子である。

14日 ▶ブレジネフ書記長、中国を除く社会主義11ヵ国大使と会見。

16日 ▶ブレジネフ書記長、米国公式訪問。

▶タタール海峡の鉄道フェリー初運航。

▶サヤンでエニセイ河氾濫。

▶韓国財界人2名訪ソ。

17日 ▶ソ連ユダヤ人科学者7名、イスラエル移住を拒否されてハンスト。

18日 ▶第1回米ソ首脳会談、ホワイトハウスで開かる。

19日 ▶第2回米ソ首脳会談、開かる。

▶オビ河中流のスルグウト港、20万トンの荷役完了。

20日 ▶第3回米ソ首脳会談開かる。

▶チューメニ(サモートル)=ボルガ(アリメチェフスク)間2,200キロメートルの石油パイプライン営業開始。

21日 ▶米ソ間第2次 SALT 交渉基本原則調印。

22日 ▶米ソ核戦争防止協定調印。

24日 ▶米ソ共同声明調印。

25日 ▶ブレジネフ書記長訪仏、第1回首脳会談。

26日 ▶第2回仏ソ首脳会談。

27日 ▶第3回仏ソ首脳会談、共同コミュニケ発表。

28日 ▶西へ流れるシベリア石油パイプラインの圧送能力毎時1万2000立方メートル。

7月

6日 ▶「ヤクート」天然ガス代表団来日。

▶ブリヤート自治共和国創立50周年。

▶浅瀬と激流のピリュイ川航行テスト成功。

▶カムチャツカの温泉に有効出力550~600kwの発電所。

12日 ▶アナドゥイル付近航行開始——砕氷船ゲオルギー・セドフ号は3隻の貨物船を誘導してチュコト民族管区のアナドゥイリ入江に入った。

▶オハ=コムソモリスク間600キロメートルの第2パイプライン完成近し。

15日 ▶オビ河入江の浚渫作業実施中。

16日 ▶ソ連・北ベトナム共同声明。

▶中ソ航空協定交渉交結。

17日 ▶ヤクート天然ガス開発で日ソ覚書き交換。

▶ソ連最高会議開く——ソ連最高会議(第8回第6会期)が17日午前(日本時間同日午後)クレムリンで、約

1,500人の代議員を集めて開かれた。この日、マズロフ第1副首相がソ連の平和外交政策、工業生産の実績や「国民教育基本法案」について報告した。

▶ソ連の金保有高は90億ドル弱と米国発表。

21日 ▶ハバロフスク=オホーツク沿岸の直通航路開始——この航路はウラジボストーク回りより1,500キロメートルも短かく、貨物1トン当り5ルーブル運賃が安くなる由。

▶イデオロギーの平和共存はないと『赤い星』が強調。

▶火星4号打ち上げ。

23日 ▶ソ連地下核実験。

24日 ▶上半期経済実績——24日のソ連政府機関紙『イズベスチヤ』は今年上半期(1~6月)の国家経済発展計画の遂行状況を発表、「工業生産は昨年同期に比べ7%伸び今年計画の5.8%を超過達成した。農業も極めて良好」と書いている。

25日 ▶パイプラインによるごみ処理技術、ソ連から技術導入。

30日 ▶フレプトワヤ=ウスチ・イリム間鉄道支線完成。

▶社会主義8カ国首脳会議、クリミアで開かる。

8月

1日 ▶最高会議で国民教育基本法採択さる。

▶73年度中ソ貿易協定調印、アントノフ旅客機11機購入。

3日 ▶チュメーニのサモートル油田、1昼夜に2万5000トンの採油量。

▶ビリビノ原子力発電所タービンテスト実施。

5日 ▶火星6号打ち上げ。

7日 ▶チュメーニ交渉遅延はソ連側の技術的問題に原因と今里広記氏語る。

8日 ▶タス通信、メドベージェフ氏の市民権剥奪報道——著名な生物学者で現在、英国滞在中のメドベージェフ氏は反体制のかどでソ連最高会議幹部会によってソ連市民権を剥奪された。

9日 ▶森林資源代表団来日。

▶英紙『デーリー・テレグラフ』、「ソ連は対中国予防戦争を計画」と報道。

▶アレクサンドロフスク=アンジェロ・スウジェンスク間パイプライン概要——延長800キロメートル、パイプ口径1,220ミリメートル、毎時1万立方メートル圧送可能。すでに2200万トンを圧送した。

10日 ▶反体制文学者アンドレイ・シニャフスキー氏、パリ到着。ソルボンヌ大学教授となるか。

▶パトリチェフ貿易相、日本人記者団と会見。

12日 ▶対島海峡の海上自衛隊水中聴音機、何者かに切断略取さる。

15日 ▶亀長農林次官、バフトフ外国貿易省原材料輸出局長に木材の価格安定と供給量安定を要望。

▶ブレジネフ書記長、アジア安保の必要性強調。

16日 ▶対ソ輸出18.3%減、輸入71.8%増。

17日 ▶ソ連複数弾頭(MIRV)の実験に成功と米国防長官語る。

18日 ▶チュメーニ油田、7ヵ月半で5000万トン採油。

20日 ▶対ドル・レート、100ドル=67.50ルーブルから71ルーブルへ切り下げ。

21日 ▶サハロフ博士、当局の圧力に屈せず西側記者と初会見。

28日 ▶科学アカデミー会員40名、サハロフ氏を非難。

▶ソ連ミサイル駆逐艦、津軽海峡通過。

29日 ▶「私は秘密警察に殺されるかも知れない」とソルジェニツイン氏、西側記者に語る。

▶英紙『ザ・タイムス』紙、ソ連当局の知識人圧迫を非難。

▶日ソ経済委幹部会、東京で開かる。

30日 ▶『イズベスチヤ』紙サハロフ博士とソルジェニツイン氏攻撃。

▶ピョートル・ヤキル氏、ビクトル・クラシン氏、反体制のとがで、懲役3年、流刑3年計6年の求刑。

9月

3日 ▶『ブラウダ』紙、サハロフ博士非難。

▶石田博英氏ら、ノビコフ副首相と会談。

4日 ▶西シベリア製鉄所酸素第2転炉拡張工事中。

▶オビ河水運でアルタイの穀物輸送。

▶西独首相、ソ連の知識人弾圧を憂慮。

5日 ▶カラフトではじめてディーゼル機関車動く。

7日 ▶サハリン北部へモルダビアから果物空輸——ルーマニアに隣接するモルダビアからカラフト北部へ桃5トン、スモモ6トン、梨12トンを貨物機で空輸した。

11日 ▶千島列島のパラムシル島噴火。

12日 ▶クズバスに年産600万トンの新炭坑開発。

15日 ▶マガダン州チュコトカのベーリンゴワヤ炭坑、一昼夜2,000トンの産出。

20日 ▶衆院本会議、全会一致で北方領土返還を決議。

22日 ▶ソ連当局国際的反響を恐れて、反体制知識人非難を中止か?

▶ソ連、チリ新政権と断交。

23日 ▶発電船セーベルノエ・シャーニエ(オーロラ)3号——チュメーニからヤクートまで1,000キロメートル

ルの氷海を3ヵ月かかって到着した。同船はヤクートのサンガル炭坑に送電する予定。

▶デモで逮捕されたユダヤ系ラトビア人、シュビルベルク氏、イスラエルへの移住許可。

25日 ▶『プラウダ』、再びサハロフ博士非難。

▶ブレジネフ書記長、タシケントで中国非難。

26日 ▶田中首相、訪欧の途中モスクワ空港（シェレメチェボ）で給油のため約1時間休憩。

▶マズロフ第1副首相、空港へ田中首相出迎え。

27日 ▶市民的政治的権利に関する国際規約批准。

▶カスピ海に毎時550トンの淡水化設備完成。

▶沿海地方で4,000トンの米供出。

28日 ▶米下院、ユダヤ人差別でソ連への最恵国待遇禁止。

▶ニクソン大統領、グロムイコ外相に議会説得を約束。

▶ブラコベシチェンスクのダリボストゴリ炭坑、9月に117万トンの石炭出荷。

10月

1日 ▶ソ連・チェコ首脳会談。

▶ソ連政府、最高会議、国慶節に祝電——ただし、両国共産党の名前は出していない。

3日 ▶アラブ連盟、ユダヤ人のイスラエル移住でソ連非難。

4日 ▶沿海地方の大豆畑、10万ヘクタール以上。

5日 ▶服役中の作家ウラジミール・ブコフスキー氏、「沈黙すれば釈放」の当局提案を拒否。

6日 ▶第4次中東戦争はじまる。

▶ソ連製 SAM-6 対空ミサイル、威力を発揮してイスラエル空軍苦戦。

7日 ▶田中首相ソ連公式訪問。

8日 ▶日ソ首脳会談はじまる。会談しばしば中東戦況のため中断。

10日 ▶田中首相、ソ連を離れ帰国——共同声明文が発表されたが、ソ連側の公文に欠落した部分が数ヵ所があることがあとで指摘され、日本の外務当局は釈明に苦しんだ。これはソ連側が故意におとしたものと見られ、今回の会談に対するソ連側の評価を暗示している。

13日 ▶ウスリーの針葉樹林内で天然の薬用人蔘の採集はじまる——薬用人蔘を今年には11万キログラム採取の予定。最近朝鮮人蔘とよばず、シベリア人蔘とロシア人は呼んでいる。

14日 ▶重要問題成果なしと、新華社田中訪ソを初論評。

15日 ▶ソ連・ユーゴ共同コミュニケ——訪ソ中のユー

ゴのチトー大統領はブレジネフ書記長との会談を終えて帰国、同夜共同コミュニケが発表された。

▶アラブ側の攻撃に合わせソ連が宇宙衛星——15日発売予定の『ニューズウィーク』誌は、「アラブ側が攻撃を仕掛ける直前に、ソ連は2個の宇宙衛星を打ち上げ、毎日宇宙船が写真撮影に最も適した時刻である正午ごろにイスラエル上空を通過するように軌道に乗せた」と伝えている。

19日 ▶コスイギン首相シリアへ、アサド大統領と会談。

▶タス通信、コスイギン首相のカイロ訪問確認。

20日 ▶マガダン州への海上輸送終了。

▶フランス政府、ソ連外交官10人をスパイ容疑で追放。

22日 ▶沿海地方興凱湖地区の米作、ヘクタール当たり3トンの収穫。

▶カラフト西岸へ今航海シーズン中に日本船40隻が入港。

23日 ▶1万2000紡錘のブラコベシチェンスク綿紡工場完成——年間5,000トンの紡糸生産の予定。

24日 ▶尼港へ修理工作船、砕氷船の誘導で入港。

25日 ▶レナ河航行シーズン終了。

29日 ▶エチオピア皇帝訪ソ。

11月

3日 ▶西独外相、ソ連石油探査で、国際機関の設立を提唱。

▶ソ連・西独航空協定調印。

4日 ▶英紙『オブザーバー』、ソ連軍人7人がシリア戦線でイスラエル軍の捕虜になったと報道。

▶チュメニ石油の対日供給量2500万トンから3000万トンに増量する用意ありとソ連側可能性示す。

5日 ▶アンジェロスウジェンスク＝クラノヤルスク間40キロメートルの第2パイプライン圧送開始。

6日 ▶ヤクートの冬季道路開通——ミールヌイから14輻編成の自動車隊が、今シーズンはじめて北極圏のアイハラなどのダイヤモンド採取地へ物資を運ぶため出発した。

7日 ▶バム＝トウインダ鉄道建設、40キロメートル進む。

12日 ▶クズネツ製鉄所第5平炉、本年32万5000トンの粗鋼生産。

▶ソ連・イスラエル国交、1967年断絶後、ようやく復交か。

▶ソ連軍事顧問団3,000人、エジプト入りと英紙報道。

▶パレスチナ・ゲリラ統一代表団、ソ連へ。

15日 ▶オビ河航行シーズン終了。本年 300 万トンの実績

▶ソ連のアラブへの武器援助急増とイスラエル発表。

18日 ▶エルマク＝オムスク間50万ボルト送電線完成。

▶ワニノ＝ホルムスク間鉄道フェリー 300 回目のホルムスク入港——開通以来 5 ヶ月で 300 回の航海を行なったフェリーは、数万トンの貨物と 2 万 7000 人の旅客を運んだ。

19日 ▶米宇宙飛行士、ソ連で訓練開始。

20日 ▶ナトカ港の荷役、11、12の 2 ヶ月で約 110 万トンの予定。

21日 ▶ナトカへ日本向けコンテナ列車、レニングラードから初めて到着——今後 5 日おきに定期的に到着の予定。

22日 ▶サハロフ氏夫人、秘密警察の脅迫を拒絶。

24日 ▶パレスチナ・ゲリラ訪ソ団、帰国の途につく。

25日 ▶福田蔵相の再登場にソ連当局、関心を示す。

26日 ▶ブレジネフ書記長、インド公式訪問、両国首脳会談。

12月

2日 ▶エジプト大統領、米ソ大使と会談。

5日 ▶ソ連、世界共産党会議、来年開催で各国党に打診中。

▶英ソ協力協定締結。

9日 ▶ソ連、オランダへ石油輸出か。

10日 ▶党中央委総会開く——ソ連共産党中央委員会の定例総会が10日モスクワで開かれ、バイバコフ・ゴスプラン（国家計画委員会）議長が74年度ソ連国民経済発展計画について、また、ガルブゾフ蔵相が74年度国家予算について報告した。またブレジネフ書記長が長大な演説を行なった。バイバコフ議長は報告の中で、73年度の工業生産は約7.4%増（計画では5.8%増）であったこと、穀物生産は史上最高の 2 億 1500 万トン（計画では 1 億 9400 万トン）であったことなどを述べた。

▶ロケット打ち上げ一部中止、日本へ回答——政府はソ連が 5 日から 15 日間にわたり西太平洋 8 ヶ所で行なう気象ロケット打ち上げ計画のうち、4 ヶ所についてマグロ漁業北米航空路の障害になるとして中止を要請していたが、10日モスクワの日本大使館を通じて 2 ヶ所で打ち上げを実施、他の 2 ヶ所の打ち上げを中止すると回答してきた。

11日 ▶サハロフ博士夫妻が病院へ——ソ連の物理学者アンドレイ・サハロフ博士に近い筋は11日、同博士と夫

人がそれぞれ高血圧と視力障害という名目で10月モスクワの病院に連れていかれたと述べた。

12日 ▶最高会議開幕——最高ソビエトは12日午前10時からクレムリンで民族会議と連邦会議を別々に開いたあと、合同会議で1973年経済発展実績と74年度計画についてバイバコフ国家計画委員会議長の報告をうけ、続いてガルブゾフ蔵相が74年度国家予算の報告を行なった。

▶バイバコフ報告概要——73年度の農業生産は 2 億 2000 万トンを記録し、工業生産は 7.3% の増加率を見込まれている。74年計画では工業生産を前年対比 6.8% 増とし、消費材の伸びを生産財の伸びより大きくする方針にかえる。石油生産は 7% 増を見込む。また73年の石油生産量は 4 億 2850 万トンであった（前年対比 7.5% 増）。

▶ガルブゾフ報告概要——74年度国家予算案は、歳出 1939 億ルーブルとし、国防費は 176 億ルーブルとする（予算の 9%）。

▶国防費への疑問多し——ソ連が現在進めている大規模な軍備拡張、多目標弾頭弾の開発装備、空母の建造、中東その他への武器援助などが、発表の予算内で実施され得るはずはなく、多額の“かくし予算”がいろいろな名目で他の部門にかくされていることは世界の常識とされている。

14日 ▶ソ連最高会議終わる——ソ連最高会議は14日、74年度経済発展計画を満場一致で承認、74年度国家予算案を承認した。最高会議は 3 日間にわたり、閣僚会議提出の両案を討議した結果、いずれも原案に修正を加えた。採択された経済発展計画と予算案の主な内容は次のとおり。①経済計画＝①国民所得の成長率は73年度に比べ 6.5% 増、②工業生産の増加率は 6.8%、消費財生産については 7.5% と重点を置く、③工業の労働生産性向上は 6%。④予算案＝歳入 1943 億 86 万 6000 ルーブル、歳出 1940 億 8801 万ルーブル、歳入超過 2 億 1285 万 6000 ルーブル。

▶セミパラチンスクで地下核実験。

16日 ▶『プラウダ』紙、集団農場の再編成を報ず。

▶ソ連紙、防衛庁非難——17日夜の政府機関紙『イズベスチヤ』はソ連を仮想敵国としたいわゆる防衛庁文書を取り上げて「日ソ間の経済協力が不信任感を植えつけようとする政治屋がいる」と植崎社会党議員と山中防衛庁長官による国会でのやりとりを紹介した。

19日 ▶グロムイコ外相、中東和平会議出席のためジュネーブ入り。

20日 ▶TU 124 旅客機、モスクワ＝ピリニウス間で墜落、死傷者公表されず。